

④ 交流学习による実践

中学部は、県立鳥取養護学校（中学部組学級）、県立白兎養護学校（訪問学級）、市立湖東中学校（障害児学級）と交流している。お互いの存在を知って認め合い、友だちや学習の輪を拡げて生活をする意欲を高めていくことをねらっている。年間を通して計画を立て、普段の学習、プール、卓球、運動会、学習発表会、お楽しみ会、ふれあい広場等、各々学校の生徒の実態に応じて内容を工夫して交流を深めている。友だちだという意識を持っていて、何か行事や催しがあると、「〇〇の友だちを呼ぼう」とか、「△△さんは卓球がうまい」等交流校の生徒のことを話題に出す生徒もいる。また、各学校を訪問すること自体をとっても楽しみにしている生徒もいる。この交流を通して、新しい環境になじみにくい生徒も、場の雰囲気戸惑いながらも、少しずつその活動を受け入れられるようになった。校外に出る事を利用して、普段乗らないバス路線の時刻を調べたり、バス停で友だちや教師と待ち合わせたりする学習を取り入れている。

このようにして、交流学习は人・物・場面等の素材を豊かに含む学習であり、生徒の生活する力および生活を楽しむ力の両面を育てる学習である。人と人とのつながりを大切に生徒自らが主体的に関わろうとする交流学习を今後も続けていきたい。

〔4〕行事等への参加

校外的な行事として、連合運動会、市中合同文化祭、中教振卓球大会等に参加している。市中合同文化祭と中教振卓球大会は中学生だけの行事なので、生徒の生活年齢をとらえさせられるよい機会である。同年代の多くの友だちの中になると、一人一人の生徒の姿や課題が浮き彫りになってくる。

市中合同文化祭は、同年代の中学生がどんなことに取り組んでいるのか、その成果を見ることががんばりを認めたり、自分と比べたりする力をつけてほしいと願って参加している。現段階では他校の生徒の発表を鑑賞する立場である。「僕たちもやりたい」という生徒の声はなかなか聞かれないが、他校の生徒の合唱を聴いた時、「みんなも大きな声がでるなあ」とか、太鼓の演技を見た時「みんなも負けとらんかもしれんなあ」などと声かけをすると、「うん、うん」とうなずく姿が見られた。

中教振卓球大会では、なかなか実力は及ばないものの一人ひとりが自分の力を発揮して他校の生徒と対戦する。「強いなあ」と自分が井の中の蛙であったことを知る生徒もいれば、本番で力を発揮しランク別で優勝するという生徒もあって、生徒たちの意欲と度胸が試される場でもある。勝敗に対して「競う」という経験をするとよい機会である。

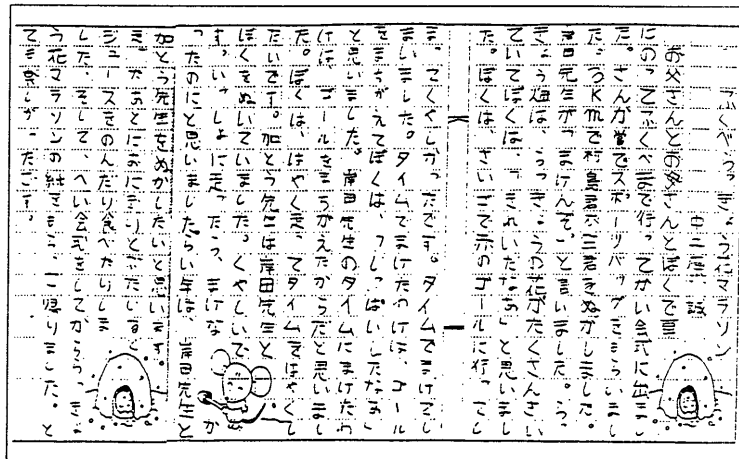
最後に、学校としてではないが、「ふくべらっきょう花マラソン」に有志が参加している。10月下旬にあり、校内マラソンや大山登山等で生徒のスポーツへの関心も上向きの時期である。スポーツや体力づくりに向けて生徒を励まし、意欲を高めるとともに、保護者への啓発も一つの目的である。学校や学部の行事ではなく、あくまでも一市民としての参加である。積極的に生活を楽しもうとする姿勢を家庭にも持ってほしいという願いが基である。子どものやる気に押されて「よし、それなら」という家庭もあれば、子どもより保護者の方がやる気を持ってリードする家庭もある。保護者によって子どもが変わることが、

この毎年の実践でよく分かる。最初は学校がリーダーシップをとるが、いずれは家庭で主体的に活動に参加してほしいと願っている。

「ふくべらっきょう花マラソン」も回数を重ねる毎に参加者も増え、家族と一緒に大勢の人々の中にまじって楽しむ姿が見られるようになった。こう言った機会を足掛かりにして、主体的に生活を楽しもうとする素地を家庭でも養っていくよう、働きかけていきたい。



マラソンをしているH男



H男の作文

[5] 家庭との連携

中学部の生徒は、心も体も成長期にある。発達の遅れはあっても、体はその子なりに着実に成長し、それに伴い、ゆっくりではあるが大人に近づいているのである。そのことに本人が気づいているか否かは別にして、周りの人からは「大人」として扱われる。したがって、「中学生らしい」姿勢や態度を育てようという意識は、教師、本人、親それぞれが持つことが当然必要になる。

生徒は、中学部に入学したことで、「中学生だ」と自覚するようで「もう、小学部ではない」ということに自負心を持っている。しかし、「中学生らしい」態度というものは、具体的な場面をとらえて教えることが必要である。周りの大人の接し方で学ぶことも多い。そうして行くうちに少しずつ大人に近づく自分の心や体を自覚できるようになっていくのである。

中学部という時期は、思春期であり、「親離れ・子離れ」の大切な時期であると考え。そこで、家庭と連携を取り合って個々の生徒の実態に応じて、柔軟に生徒の心や体の変化に対応していきたい。将来的に生徒を支える基盤は家庭にあることを重視したい。

《家庭との連携の視点》

- 学習のねらいや取り組みを、絶えず具体的に家庭に知らせ、学習したことが生きた力となるような実践の場を家庭でも工夫してもらう。
- 学校の話題や生活の様子を子どもから引き出すような雰囲気づくりを心掛けて、声かけをしよう。
- 学校での学習を発展的につなげたい催しや計画がある時は、保護者にも参加を呼びかけ、生徒と保護者が主体的に活動をしようとする気持ちをバックアップする。 (田村)